

# イギリス的な情景

— the scenes in Britain —

早稲田大学 教授  
小田島 恒志

(第8回)

スキー？

たまたまロンドンにいるときに知り合いの作家の出版記念会があって、夫婦で出かけて行った。会場はロンドンの“歌舞伎町” Soho 地区にある『Opium』という名前の店。ちょっと不安になったが、行ってみたら健全な会でホッとした。その際、あるカップルと同席したのだが、女性の方が昔日本で英語教師をしていたことがあるということもあって、話が弾んだ。そのうちに、こちらが英米演劇の翻訳をしているとわかると、彼女が「私の兄も演劇をしていて、今度ロンドンの舞台に立つから観てやって」と言う。「はい、ぜひ」と軽い気持ちで答えていたら、その「兄」というのがオリヴィエ賞を二度もとってるコンレス・ヒルという名優だとわかって吃驚した。

その舞台『シュート・ザ・クロウ (Shoot the Crow)』(O. マカファーティ作) を観に行ったら更に吃驚した。会話がほとんど聞き取れない…こういう時はテキストを購入して読んで「復習」するのだが、読んでみて愕然とした。読んでわからない…これは北アイルランドのベルファーストのある建設現場を舞台に、4人のタイル貼り職人が繰り広げる物語だが、会話が悉くベルファースト訛り、かつ、労働者独特の言葉づかいなのだ。いわゆる「ライミング・スラング」が多用され、たとえば、「うちのwifeが…」と言うときに「うちのfork and knifeが…」と言ったり、「お前の

pocket に…」と言うときに「お前のsky rocket に…」と言ったりする。このタイトル自体、「カラス」は関係なく、ただ、「Go」という一言を表わす押韻表現で、労働現場で「(もう仕事を切り上げて、さっさと飲みに行こうぜ)」という意味になる隠語だそうだ。(と、あとで作者から聞いた。) ちなみに日本語の「雉を撃ちに行く」とは全く関係がない。

それでも、観劇した舞台を思い出しながら辞書を頼りに読んでいくと、だいたいの表現は「解説」できたのだが、どうしてもわからなかった言葉がある。冒頭の場面で、年少の男が一人で夢をしゃべりまくる中で、「…こうやって働いて貯めた金でバイクを買って、後ろに女の子を乗っけて、off ski」と言う。ん、スキー？ バイクの話をしているのに？ 何かの押韻スラングか？ どうしても答えが出ず、Opiumで会った女性にメールをして聞いてみた。「ああ、それは、最近ベルファーストにも移民労働者、とくにポーランドなどの東欧からの移民が多いので、言葉を真似て語尾に-skiをつけるのが流行っているのよ」とのこと。はあ？ 特にこの場合off につられてskiをつけることで「オフスキー」とスラブっぽくなるそう。なるほど。これは聞いても読んでもわからなかったわけだ。